
寝坊助と団子姫とあいつ

団子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寝坊助と団子姫とあいつ

【Nコード】

N9008Y

【作者名】

団子

【あらすじ】

全国模試1位の高校生である黒野大地が、神の手違いにより伝説の勇者の伝説の世界に、エール・ランドという名前で転生させられた。果たしてどうなる？

キャラ紹介（１）（前書き）

初投稿です。

上手く書けるかわかりませんが最後まで読んで下さったら嬉しいです。

ちなみに話については原作を参考にさせてもらいますがオリジナルストーリーも途中から使います。

まずは伝勇伝のキャラ紹介です。

キャラ紹介（１）

ライナ・リユート 天才的な魔法センスと優れた体術、暗殺術などがあり『ローランド最高の魔術師』と呼ばれているが、本人はそれを花にかけず、毎日寝てばかりである。

フェリス・エリス 幼少のころから両親による剣の特訓を続けているため、その剣の腕前はずば抜けている。だが、特訓のせいで感情が失われている。

シオン・アスタール 容姿端麗、頭も良く人望があり一見すると好青年に見えるが、実は性格が悪く親友であるライナをよくこきつかう。

この三人は覚えておいて下さい。

キャラ紹介（１）（後書き）

以上が伝説の勇者の伝説の主要メンバーです。

キャラ紹介と国紹介（前書き）

オリジナルキャラと国についての説明です。

キャラ紹介と国紹介

エール・ランド 本名黒野大地 神様のせいで死んでしまったため神から特別な力を授かる。その為ライナやフェリスを倒せる程の力を有しているがあまり目立ちたくない所以人には知られていない。

国紹介

ローランド帝国 ライナやフェリスの故郷だが、王が狂っていて酷いことを繰り返す

ネルファ皇国 ローランドの近くの国で賢王と呼ばれるグリード・ネルフィが統治している

ルーナ帝国 ローランドの同盟国。宗教が盛ん

エスタブル王国 ローランドの敵対国

キャラ紹介と国紹介（後書き）

ではつぎから始まります。

基本的に原作の内容にするつもりですが、結構違っていたりしますのでご了承ください。

ブローグ（前書き）

誤字脱字は指摘お願いします。
では始めます。

プロローグ

黒野大地は今高校で勉強していた。なぜかという、3ヶ月後に受験を控えており強制的に勉強させられていたからである。

そんな日が毎日続いていたので、黒野はとにかく暇でしうがなかった。授業が自分のレベルに合っていないのである。

放課後に家に帰っていると子供が道に飛び出しているというベタな展開だった。更に子供の十メートル先には車が走っていて、もうベタすぎて何も言えなかったが、さすがに見逃すわけにはいかなかった。子供を助けた、まではよかったのだがその時既に車が目と鼻の先にあつたので黒野は死を覚悟して目を閉じた。

いつまでたつてもその衝撃が来なかった。黒野は目を開けた。するとそこには白髪長髪で真っ白の衣を来た子供がいて、世界も真っ白だった。

「あんたは誰だ？」

と黒野が尋ねると、

「私は神を作りしものである。まずお前に言うことが一つ、今からお前を別次元に行かせる。」

といきなり言われた。

黒野が、

「何で？」

と聞くと、

「実は私の手違いでな、お前が死んでしまうようにしてしまったの

だ。だから…」

「俺を別次元に？神を作った奴が間違えるなよ。まあ暇だからちよ
うど良かった、ていうのが不幸中の幸いだな。ま、いいから早く送
ってくれ。」と黒野がアツサリ言うものだから、

「すまん。お詫びに特別な能力を二つつけておく。だが…」

「あーはいはい、記憶が無くなるから教えてくれないってか。わか
ったから早く。」

「先読みするでない！まあ良い。それとお前の知能はそのままで転
生する。」

おもむろに神を作った奴が立ち、

「年齢は五歳だ。それでは伝説の勇者の伝説の世界に行つてこい。」
とそこで視界が暗転した。

ブログ（後書き）

一週間に一回更新したいと思います。
これからもよろしくです。

目覚め（前書き）

ども。

無駄にページ数が少ないですが勘弁して下さい。

目覚め

目を覚ますと、世界が赤く染まっていた。夕日が沈んでいたのである。だがなぜ自分がここにいるのかが分からない。

そこは公園だった。砂場があるだけの質素な公園で、その中央で寝ていた。

なぜ寝ていたのか考えていると、突然後ろから何か迫っている気がしたので前方に転がった。

振り替えると、無駄に豪華な服で着飾った太った男と、鎧を着て剣をこちらに構えているものが数人いた。

「誰でしょうか？」

と聞くと、

「我を知らんと申すか！もうよい。こいつを殺せ！」

とデブが言った。すると周りのやつらが一斉に襲ってきた。

何故襲って来るのか解らなかったが、殺されるのは嫌なのでしようがなく抵抗することにした。

だが、多勢に無勢、さらに向こうは訓練を受けた兵士である。徐々に剣が浅くない傷を少年に刻んでいく。

「まずいな。なんとかしないと。」

と少年が呟くと、いきなり頭の中に倒せる方法が浮かんできた。だが、実行しようとしたときいきなりやつらの動きが止まった。一人が言う、

「あいつの目を見る！」

また、一人が言う、

アルファステイグマ
「複写眼だ！」

さらにもう一人が言う、

「いや、違う五方星じゃない。六方星だ。」

最後の一人が言う、

「あ、あいつは…」

とそこで全員が揃えて言う、

「化物だ…」

と。

俺は自分が化物なんだと知らされた。

目覚め（後書き）

主人公の目は『金色のガッシュ・ベル』の『答えを出すもの』を参考にしました。

アルファステイグマ
名前は複写眼でいいです。

始まりは藍色（前書き）

主人公の容姿　明るい紫の髪で背丈は平均

ども。

駄文ですが、読んでいただけると嬉しいです。
それでは。

始まりは藍色

そこはどこかの施設のようだった。

俺はあの公園で気絶させられここにつれてこられた。

俺の頭の中には『化物』という言葉でいっぱいだ。まず始めに、

そもそも何で俺は化物呼ばわりされるんだ？

と考えてみた。

やはりあの『複写眼』というものだろうか、だとしたら俺はどうしたらいいんだろうか。まあ考えていてもしょうがない。

それにしても何で俺はあの剣をよけたんだ？俺には体術の心得なんてないぞ。

とまあいろいろ考えているとある結論に達した。

それは、あの攻撃はどこから来るかわかっていたからであるということ。だから、あの目は俺の頭脳を強化するもしくは天才的にするという可能性がある。だとしたら、前者は可能性が低いと思う。なぜなら、俺の頭脳がずば抜けていることはわからないし、強化の程度がどれほどかわからないからだ。

その結論に、

「なるほど。」

と小さく呟くと、

「どうしたんだい？」

と俺の声に反応するやつがいた。

俺は考えに集中しすぎて気づいていなかったのだが、その部屋には俺を含めて四人の子供がいた。

みんな年齢はおれと同じようだ。向こうにいる男は黒髪黒目でなんか眠そうだ。その横の女は髪が水色で目が赤色。俺に今話して来た

奴が金髪でなんか目を閉じている。

と考え事をしていると、

「ねえ、大丈夫？」

と聞かれたので、

大丈夫と答えようとしたら、いきなり誰かから殴られ五メートルほど吹き飛ばされた。

「あなたたちは選ばれた天才よ。殴られたあなたは私語していた罰。

」

俺は何かいいかえそうとしたがまた殴られそうだったので何も言わなかった。

すると、

「へらへらするんじゃない！」

という声と同時に黒髪の少年が飛んでいった。

俺はそれをみながらさっき殴ったやつを見た。

そいつは藍色の髪で、二十代ぐらいの若い女だった。俺は殴られ具合から男だとおもっていた。なのに、今日の前にいるのは女。ということはまず俺はこいつには勝てないと思う。なぜなら、まず俺はこいつの実力を計り違えた。さらに、体術が素人の俺がみても、動きにまったく隙がないのだ。

と自分の考えに夢中になりすぎていてあいつらの話はきいてはいなかった。

「ということでは今の君の発言にムカついたので目の前にいるこの女の子を殺しまーす。止めれるものなら止めてみなさい。」

と女がいった、と同時に手を宙に踊らせた。すると魔方陣らしきものが描かれていった。少年もそれに対応して魔方陣を書いているが遅い。そこで女の魔法が完成した。

「遅い。求めるは雷鳴

稲光^{いづち}」

女の魔方陣から雷が飛び出す。少年は、

「やめろおおおおおおお!!!」

と叫んでいる。

だが、少女は雷に反応してよける。

それを見て、俺は改めてなぜ自分がここにいるかを考えてみる。

俺がみてもかなり強い女がいて、俺よりも強い少年少女がいる。だとすれば、俺たちを殺すためという可能性が出てくるが、すぐにその考えをなくす。何故なら、女は俺たちを殺そうとしていない。それは、さっきの俺への攻撃から気づいている。さっきの言動や行動からすると…

と、そこで施設の中が重い雰囲気にも包まれた。とっさに女を見るとこちらを鋭くにらみつけている。それに黒髪のやつも金髪のやつも動けなくなっている。蛇ににらまれた蛙とはこのことかな、とか思っている、あの水色の髪の少女が、

「まったく、男子って情けなーい。すぐ動けなくなるんだから。」とか言っただけで平然と動いていた。

「へえ、この殺気のなかでそれほど動けるなんてたいしたものじゃない。えーと、あなたはピア・ヴァーリエね。先天性魔導異常の能力者で貴族に買われたけど協調性がなく、問題ばかり起こしてここにつれてこられた、と。」

女は手にいつの間にか持っていた紙を見て読み上げた。それに少女は、

「うっさい！凡人の言うことは聞こえません。もう怒った。滅殺けってー。」

とか言いながら魔方陣を書いていく。

それに金髪の少年と黒髪の少年は、

「ほ、本当に協調性がないんだ。」

「う、うん。」

などと話している。

そこで少女の魔方陣が完成した。その魔方陣の中央にさっき女が放

った魔法よりも大きい雷がある。だが、女はいつの間にか少女の後ろに回り込んで、少女を地面にうつ伏せに頭を掴んで倒して魔法を解除した。

「凡人に倒されるあなたはなんなんでしょうね。ゴミ？虫けら？さてと、虫けらが人様に逆らっちゃだめよねえ？少しの間だけ顔あげてあげるから。あやまってみなさい。」

と女が言って顔をあげさせると、

「うう、凡人が天才に逆らっていいと…」

少女が虚勢を張ろうとするが、女はそれをやらせない。少女の顔を地面に何度もぶつける。何度目かして動きを止めると、

「うう、ごめんな…さい。」と涙と鼻血でまみれた顔で、息も絶え絶えに言う。

「さて、そこでつつたっているあなたはなにをしているの？」

と俺をみて女が言ったので、

「お前は俺らを鍛えるためにここにいて、そうだろう？」

と答えてみた。

それに女は目を丸くして、

「あら、何でわかったの？」

と言う。

その答えに俺は何も答えない。いや、答えれない。女が徐々に体力を込めているのがわかったからだ。だから俺も構える。自分の力はこの女の足下にも及ばないことを知っているのに。

「へえ、勘かと思っただけ違うみたい。あなたの名前はなんていうの？」

「…エール・ランドだ。」

俺はなぜか自分の名前は知っていた。なぜかはわからない。だが、もう自分の考えに夢中になることは出来なかった。女がこちらに向かって走ってきたのである。しかも、尋常ではないスピードである。だが、目の前に来て殴りかかってきたのはなんとかよけた。

だが、二度目は避けきれず腹にくらった。とつさに急所を外させたからよかったが、それでもかなりのダメージが残る。

「へえ、やるじゃない。じゃあこれはどう防ぐかしら？」

といって、魔方陣を書き出す。

俺は防ぐ方法を必死で考える。すると、あっさり浮かぶ。俺は、靴を脱ぎそれを女の魔方陣に向かって投げ、そのまま目をつぶり、水の壁が目の前に出来る様子をイメージした。

「私の魔方陣の構成を歪ませるなんて考えたわね。だけど終わりよ。求めるは雷鳴　　稲光！」

女が呪文を唱えるが、俺も準備は整った。

「水の壁！」
ウォーターシールド

俺の魔法が発動し雷を止める。

「な！？」

と驚いたのは女だけではなく、俺を除く全員だった。

なぜ驚いているかは俺にはわからなかったが隙ができたので、立て続けに魔法を唱えることにする。頭の中に雷をイメージして、

「サンダラ！」

と唱えた。すると女の魔法よりも小振りな雷が女を襲う。女はかわして、また魔法を書いていく。

俺は奥の手を使うことにした。頭の中に強大な炎をイメージする。

そして、女の魔法と俺の魔法が同時に発動する。「求めるは殲虹

光燐！」

「全てを焼き尽くせ！ファイジャ！」

俺の強大な炎と女の光の槍が衝突し、小規模な爆発を起こして消える。

その一瞬の間に女は俺の後ろに回り込み蹴りを放つ。反応が一瞬遅れたせいでそれをくらってしまった。それが決め手となり俺は両手をあげて、

「参りました。」

と諦めた。

「その魔法は何？あなたの特殊能力かしら？うーん私じゃわからないわね。ライナ！」

「へ？」

「あなたさつき複写眼であれを見たでしょ？あれの構造は見た？」と女がライナと呼ばれた黒髪の少年に聞くと、

「いや、見えなかった。」

と言っている。

それに俺は首をかしげる。今の会話からすると俺のさつきのは魔法ではなく、俺の特殊能力の可能性が高い。ひょっとしてこの目の能力の一部なのだろうか。まあそれはこれから探していくでしょう。

と考えていると、

「あなたの能力は極めて稀なようね。ま、それは今後どうにかなるでしょ。」

そこまで言うと言を少し大きくして、

「私の名前はジェルメ・クレイスロール。あなたたちの神となるものよ。私の命令は絶対で逆らったら殺すから。それと、エールがいったように私はあなたたちを訓練する。そのために今テストをした。あなたたちの実力はだいたいわかったわ。早速だけど、あしたから訓練を始めるから、みんな朝8時にここに集合ね。それと、この施設にある部屋は好きに使っていいから。それじゃ。」

そういうとジェルメはどこかへ行った。

始まりは藍色（後書き）

主人公の能力

- 一 頭脳を十倍にして、さらに相手の攻撃パターンがわかる。
- 二 FFの魔法やオリジナルの魔法をイメージで出せる。但し体力と精神力を消費する。

自己紹介と謎（前書き）

読んで下さり恐縮です。

自己紹介と謎

「ちょっと、あんたさっきのは何よ？」

と水色の髪をやつがいった。さらに、

「あれはなんだろう？普通の魔法じゃないようだし…」

と金髪のやつが言う。

（仕方がない。答えてやるとするか。と、その前に…）

「教えるのは構わないけど、まず名前教えてくんねえかな？」

と聞くと意外な答えが帰ってきた。

「へ？さっきの話聞いてなかったの？僕たちの名前はジェルメが言
ったよ。」

と金髪のやつが言った。

さらに、

「まあ、あんたはさっきぼんやりしてたからね。あのときは殺そう
かと思ったけど、この優しいピア・ヴァーリ工様が許してあげまし
よう。」

なんてことを偉そうにピアが言っていたが、

「そうか。なんか知らんがありがとう。」

と答えておいた。

「僕はペリア・ペルーラだよ。《全結界》の能力を持っているんだ。
」

と金髪のやつが言った。しかしそれに、

「全結界って何？お前が目をつぶっているのに関係があんの？」

と尋ねると、

「それに答えるのは君のさっきの魔法っぽいのが何なのか教えても
らう必要があるね。さてそろそろ教えてくれても…」

「ちょっと待てえええ！俺の自己紹介してないよ！」

ペリアと話に夢中になって黒髪のやつを忘れていた。だが、なぜか
そいつの名前だけは知っていた。

「ライナ・リユートだな？《複写眼》の保持者で間違いないな？」

「へ？何で俺の名前は知ってるの？」

「それはもちろん勘！」

と言い張る俺にみんなは半ば呆れていた気がしたのは気のせいだろうか。

今俺は自分の部屋をどこにするか決めている。

先程の会話でみんなの能力は解った。俺の能力が稀だということも解った。

「まあこれから調べればいいさ。」

と呟き、良さそうな部屋を見つけたので中に入ると、古風なスーツを着こなした二十代後半の男がいた。

自己紹介と謎（後書き）

短くてすみません。

親バカの願い（前書き）

ちよつと内容が複雑になってきたせいかいつもより見にくいです。
あとオリジナルの設定も出てきます。
それではどぞ。

親バカの願い

その男は金髪で青い瞳を持っていた。それだけならエールはそれほど驚かなかっただろう。部屋の清掃員だろうと結論を出すに違いない。だが、その男にはエールが驚くことがあった。

「いやー驚かせてごめんね。君はエール・ランド君で間違いないね？」

男の考えていることはわからない。読心術には多少長けていると思っていたが、これほどまで心が読めない奴はいないと思う。だったら……

「ファイヤ」

と唱え、小振りな火の玉に男を襲わせる。そして男を捕縛するための魔法を唱えようとするが、いつの間に炎を消した男が、一瞬で後ろに回り込み、

「止まれ。」

と一言呟いた。すると体が動かさなくなった。

「いきなり見知らぬ人に攻撃するのは汚いんじゃない？」

と男は明るい口調でそう言ってきた。

「……いったい俺になんのようだ。」

「それは君もわかつているだろう？解除。」

と男が言う。と俺を拘束していた不可視の力が解除された。

「なぜ解除する？解除せずに話をすればいいのではないか？俺はお前を殺すかもしれんぞ？」

「君が僕を殺す気ではないのはわかってるよ。いや、殺すべきではないと判断しているだろう？君は僕の正体を推測しているから。」
確かに推測している。この男の雰囲気、顔立ち、それがライナにそっくりなのだ。それにはさすがに驚いた。

「……ということはやはりお前はライナの……父親か？」

それがエールの推測だ。先ほどライナは五歳以前の記憶がないと言

った。それはつまり、

「お前はライナを捨てたのか？」

そう男に尋ねた。

「君の言う通り僕はライナの父親だ。だがライナを捨てたわけではない。僕は……いや僕たちはライナを愛している。けど、今は一緒にはいられないんだ。だから、陰ながらライナを見守るしか僕には出来ない。」

「なるほど。状況はだいたいわかった。お前は俺に何をして欲しいんだ？」

すると男は呆れたように、

「君は本当に頭が切れるな。僕の正体を見破るは、僕の意図に気がつくは、本当に五歳なのか疑問がわくよ。」

自分が頭が切れることはどうでもいい。そんなことよりも、

「なぜ俺も知らない俺の年齢を知っている？」すると、男は一瞬しまったという顔になった。

「そうか。言えないことか。ならば仕方がない。そんなことより話とは何だ？」

「あ、ああ。実は君にお願いがあつてね。」

だが、そのお願いの内容はだいたいわかっていて。

「ライナを支えてくれってか？」

すると、男は驚愕の表情を浮かべた。

「親バカ過ぎるな。いくらライナが【複写眼】を持っているといつても心配のしすぎだ。あいつはそんなに弱くない。酷い言葉を投げ掛けられ信じていた人に裏切られても、あいつは人を信じている。苦しいはずなのに、辛いはずなのに……な。俺にはとうてい真似できないな。」

と言うと男は、

「確かに君の言う通りだ。だがライナには君の知らない大きな闇がある。それにライナはいつかそれに立ち向かわなくてはならない。きつとライナはそれに耐えきれない。だから、君の力が必要なんだ。」

「大きな闇がある？【複写眼】よりもか？」

「そうだよ。ここから話すことは絶対に他言してはいけない。いいかい？」

「おれの秘密を教えてくれるなら構わない。」

それに男は頷く。

「もともとそうするつもりだったからね。じゃ話すよ。」

そう言って男は語り始める。

【勇者】について。

【悪魔】について。

【女神】について。

そして、【司祭】について。

その話の内容はエールですらよく解らなかった。だが、わかったことが一つ、

「みんな狂っている。」「そうさ。そしてこの国は今話したお伽噺で【勇者】と【悪魔】がすんでいるんだけどもう君は気づいているだろう？」

確かにこの事が実際にあるとすると、ライナは死よりも深い絶望を味わうことになる。

「もしや、お前は【全ての式を解くもの】つまり【寂しがり（ライナ）】をライナに入れたのか？」

すると男は悲し気な表情で頷く。

「だが【複写眼】の呪いからライナを救うにはそれしかなかった。」複写眼の呪い、それは感情が昂ると暴走し周りの物を無差別に破壊するというもの。【全ての式を解くもの】を入れると暴走しても戻れるらしい。「いつライナに会いに行くんだ？」

「ライナが覚醒したら会いに行くよ。それまでは死なないように裏から手を回すつもりだよ。」

「そうか。それともう一つ聞きたいんだが…」

「なんだい？」

「お前はローランドの何なんだ？」

そう尋ねると、向こうは黙り込んだ。そしてすぐに、

「僕はローランドの亡霊のようなものさ。さてとそろそろ君の力について教えようか。」

それに俺は頷いた。男の言うことに嘘、偽りはないと断言できるし、何より自分の息子を助けたい、という気持ちに心をうたれてしまったのだ。

だから、

「俺は誓うぞ。この情報を得る代わりに、ライナの親友で居続けることを。俺は約束するぞ。どんなときでもライナを見捨てないことを。」

「ありがとう。それだけの強い意思がある君に、ライナとは違う異能を持つ君を選んでよかった。」

そして男は語り出す。

そして歯車は狂い始める。

そして【寂しがり^{アスルード・ローランド}の悪魔】と【堕ちて狂った勇者】と【自然^{エール・}の管理者】の物語が始まる

親バカの願い（後書き）

能力については次回。

自然の管理者（前書き）

書き方を少々改善しました。

見易くなったら良いのですが……。

自然の管理者

ある時、【自然の管理者】と呼ばれる、【司祭】でも【女神】でも【悪魔】でも【勇者】でもない良く解らない異形が生まれました。彼は世界の自然を愛し、平和を強く望んでいました。彼は平和のためには努力を惜しみませんでした。

そんな彼を支える異形がもう一体いました。それは堕ちた【司祭】でした。【慈悲の司祭^{アル・クラウン}】と呼ばれる彼女は他の【司祭】と何かが根本的に違いました。

ある時、彼と彼女はいつものように自然を治めていました。しかし、平和な時間がある異形によって破られました。

その異形は【女神】に南の土地に【人間】という結界で封じられていましたが、そこにいた【悪魔】の半身、【全ての式を編むもの】を食べ結界を破る【人間 α 】という【人間】とさほど変わらないものを編み出しました。【人間 α 】は【人間】を殺し、その後を【勇者】が歩きます。

やがて、【勇者】は【女神】が大事にしている【何か】を喰らおうとします。【女神】は抵抗しましたが、狂った彼には敵わずみんな食べられてしまいました。

そして、彼は【何か】を喰らおうとしますが、【自然の管理者】と【慈悲の司祭】はそれが無くなると彼らの愛した自然と平和が消えてしまうのを知っていたので、彼らはその身を持って【何か】を封印しました。

【勇者】はそれに絶望しました。しかし、優しい【悪魔】のもう一つの半身である【全ての式を解くもの】は言いました。『じゃあ僕を食べてその絶望を押し付けたいいよ。』と。

「さて、ここまででいいだろう。」

目の前の男はお伽噺を語っていた。

「その話の【自然の管理者】というのは俺のことだな？」

「うん、そうだよ。」

男は淡々と続ける。

「君はこの話の中では良く解らない力を秘めていた【何か】を封印した。まあ、手助けもあつたけれど、君の力は【勇者】にも【悪魔】にも劣らないだろう。もしかしたら上回っているかもしれないんだ。」

エールは男に尋ねる。

「俺の祖先……かは知らんが、その【自然の管理者】の力はどういったものなんだ？」

「名前の通りさ。自然を扱えるんだ。自然を扱えるということは、この世界では人工的に作られた自然、つまり魔法よりも普通に強いね。だけど、いくつかの制約があつてね、まず人には大きな怪我を与えないこと。くらった人にはいわゆる幻覚のようなものさ。次に、精神力や気力を酷使する事。まあこれも鍛えたら気にならなくなる。そして最後のこれぐせものなんだ。魔法のものと、普通の人には見えない空気中の金色の粒子が、見えるけど触って魔法を発

動できないこと。」

「何！？本当か？」

エールにしては珍しくかなり驚いた。いくつかの制約があるのは薄々感づいていたが、魔法が使えなくなるのは予想だになかったのである。

「うん。本当だよ。あと君の眼についてなんだけど、おそらくそれは相手の行動を先読みしたり、相手の記憶をいじったり、精神力を強化する眼だと思う。」

「なんで曖昧なんだ？」

男の発言が気になり問いかける。

「その眼についてはかなり古い文献にしか載っていないくてね、二つ目と三つ目はあっていると思うんだけど、一つ目はどうしても分からない文字で読めなかったんだよ。」

「そうか。残念だ。」

「最後になるが、君の眠っている力を引き出したいけどいいかい？」
「俺に決定権はないだろう？断ってもやるくせに。で、その力つてのは何だ？」

「あはは、バレた？まあいいや。それはね、この世界にあるものを紡ぐ力であり、【自然の管理者】でしか扱えない究極の力。それは全てのものを分解する破壊の力と、全てのものを作る再生の力がある。それはエーテルと呼ばれている。あ、いい忘れてたけど君の力

は異形に使って真価を発揮するから。」

「【司祭】や【女神】とか言っやつか。」

「そうだよ。さてもう僕には本当に時間がないからさっさと済まさせてもらうよ。」

そう言って男はエールの頭を指で貫き弄った。だが、不思議にも痛みはなかった。

暫くして男は指を抜いた。

「君の自然の力は今は魔法よりも弱い。だから君の特殊な魔法のよくなものを封じさせてもらったから。これで余計な力もなくなり君の自然の力が強くなるだろう。エーテルは破壊の力と再生の力以外はいくら使っても構わない。だが、破壊と再生の力は一日に合計で三回だよ。四回目を使うと強制的に二十四時間の睡眠に入るから。さてと……」

そこで男は言葉を止め、指を鳴らす。すると強烈な睡魔がエールを襲う。

「君の僕との会話の記憶は人には話せなくしておいた。消してはいないからね。それじゃあ僕達の息子をよろ……」

そこでエールの意識は限界に達した。薄れ行く意識の中で彼は思った。

（名前は何なんだよ。）

そこは真っ白な空間だった。そこには本物の神が存在していた。

「はあ、わしの与えた術式を消し去るとはあの男やはりチート過ぎじゃろ。しかし、おかげであやつが強くなったわい。頑張れよ【自然の管理者】……我が子孫よ。」

エールが目を覚ますともう朝になっていた。時刻は七時半。まだ指定された時間には間に合うだろう。

「はあ、やつぱ世界を旅したいなあ。相棒がいつか見つかるといいな。でも今はただ生きるためにがむしゃらになろうかな。」

それは始まりにして終わりの日。
それは黒野大地がエール・ランドへとなった日。それは全ての歯車が狂い出す日。

「俺が、必ず全ての平衡を司る。」

少年の決意の日……。

自然の管理者（後書き）

オリジナルばっかです。

けっこう名前や設定は適当にそれらしく作っていますんで、あんまり気にしないで下さい。

ちなみに次回から結構時間が飛ぶと思いますよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9008y/>

寝坊助と団子姫とあいつ

2012年1月13日23時45分発行